

2016年4月3日

「しかし彼らは、イエスが生きておられること…聞いても、信じなかった。」 マルコ 16:11

マルコ福音書は16章8節で完結していますが、「後代の加筆」（新共同訳の凡例）で、復活以後の事が述べられます。

復活の主は、「まずマグダラのマリアに御自身を現され」ます。「以前イエスに七つの悪霊を追い出していただいた」という過去を持つ彼女が、「他の婦人たちよりも、より大きな憐れみを受けた」（カルヴァン）のです（復活の証人第1号として！→Iコリント15:3-8）。

マリアは、「イエスと一緒にいた人々（男の弟子たち）が泣き悲しんで」いる所へ行って、主の復活のニュースを知らせますが、彼らは主の死を悲しむ余り、せっかく「マリアがそのイエスを見た」と伝えても、その言葉を信じないで閉じこもったままです（心を開く必要！）。

その日の午後、「彼らのうちの二人が田舎の方へ歩いて行く途中、イエスが別の姿で御自身を現され」ます（→ルカ24章「エマオで現れ」）。二人は勇気を与えられて帰って行き、「残りの人たち（11弟子）に知らせ」ます（信徒→教職者！）が、すぐには信じません。しかし、時間と共に彼らも「イエスが生きておられる」ことを信じる者になります。

復活の主の命の水を受けた私たちは、その証人として、「注げ命の真清水を」（讃217番）と、根気よく伝えるのです。

2016年4月10日

「全世界に行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝えなさい。」 マルコ 16:15

復活以後、福音が伝えられますが（→結び二）、それは主イエスが、人間である弟子たちを用いて働かれたのです。

復活の日の夜（→ルカ24:36以下）、「十一人が食事をしているとき、イエスが現れ、その不信仰とかたくなな心をおとがめに」なります。復活のニュースを聞いてもすぐに信じなかった故ですが、信じてからも不安定で弱いのです。

しばらく後に、主はガリラヤで弟子たちに会い（→マタイ28:16以下）、「全世界に行って…福音を宣べ伝えなさい」と、伝道の使命を与えられます。「信じない者」ではなく、「信じて洗礼を受ける者」になって欲しいのです。主が共にいてくださるので、「悪霊を追い出し…言葉を語り…蛇をつかみ（→創世記3:15）…害を受けず…手を置けば治る」というような奇蹟も起こるでしょう。

40日後、「主イエスは…天に上げられ…座に着かれ」（→ルカ24:50以下）、「弟子たちは…宣教し…主は彼らと共に働かれ」ます。「彼らは主が与えてくださるものを越える力は持っていないのである。」（カルヴァン→Iコリ3:6）。

「北の果なる氷の山」（グリーンランド島）や「露は草木に」（セイロンの紅茶）と歌う広い世界（讃214番）の「すべての造られた者に」福音を伝えるのです。

2016年4月17日

「草は枯れ、花はしぼむが、わたしたちの神の言葉はとこしえに立つ。」 イザヤ40:8

イザヤ書後半（40章以下）は、前半とは時間的にも（BC700年頃→545年頃）、場所的にも（エルサレム→バビロン）、離れています。「バビロンのイザヤ」は、主の救いの時が来たと言います。

「慰めよ、わたしの民を慰めよ」というメッセージを「エルサレムの心に（ねんごろに）」語り、「苦役の時は今や満ち…罪のすべてに倍する報いを主の御手から受けた」と罪を赦されます。「父親としての優しさの故に、神は厳しくするのを嫌われる」（カルヴァン）のです。

「（天から）呼びかける声」が「主のために、荒れ野に道を備え…主の栄光が現れる」ようにせよ（第2の出エジプト!）と命じ、預言者は「何と呼びかけたらよいのか」と応じます。「肉なる者」（バビロン帝国）は砂漠に咲く花のように滅びますが、神の言葉は滅びません。

勇気を与えられた預言者は、「良い知らせをエルサレムに伝える者よ」と呼びかけて、「あなたたちの神…は力を帯びて来られ…羊飼として…御腕をもって集め…導いて行かれる」と民に告げさせます。捕囚になっていた民が故国に帰る時が来たのです（→35章の終末預言）。

人間の栄華は移りますが、神の言葉は永遠に変わらないので、「み言葉はわが命の基なれ」（讃284番）と歌うのです。

2016年4月24日

「疲れた者に力を与え、勢いを失っている者に大きな力を与えられる。」 イザヤ40:29

バビロン捕囚になったユダの民は、長い外国での生活の中で主なる神を忘れそうになっていました。預言者は彼らに、まことの神のことを知らせたいのです。

神は創造者であり、人間の「手の幅をもって天を測る」ことは出来ず、「主の霊を測りうる者」もいません。主の前では「国々は…一滴のしづく…無に等し」いものに過ぎません（偉大な神!）。

バビロンの神々は、「像を造り、据え付け」られて動きませんが、「主は…大空の上にある御座に着」いて世界を支配されます。「なんじら目をあげて高きを見よ」（文語）と言われます。そういう信仰が大切です（ダイナミックな神!）。

「ヤコブよ…イスラエルよ」と呼びかけて、主は彼らを忘れず、「とこしえの神」であって、「倦むことなく、疲れることなく、その英知は究めがたい」御方であると共に、彼らを助けてくださる御方だと言います（情け深い神!）。彼らが弱くても大丈夫です。「人間の力は簡単になくなるが、神の力は決してなくなる。」（カルヴァン）「主に望みを置く（待ち望む）人は…鷲のように翼を張って上る」のです（→2:22）。

私たちは疲れて力を失いますが、「新たな力を得」るために、「わが主の愛のみもとに」（讃517番）帰りましょう。